

秋田方言の音声現象に関する調査報告

—— 高年層複数話者の実態に即して ——

大 橋 純 一

An investigative report on the Akita dialect speech phenomenon: based on the true state of several elderly speakers

OHASHI, Junichi

Abstract

This paper investigates several elderly speakers to study certain speech phenomena that characterize the Akita dialect, and reports the existing state of each. Specifically, the confusion of /i/ /e/; the confusion of /si/ /su/; the vocalization and nasalization of /t/ /d/; Ha group labial sound; and Ka group / Ga group contracted sounds are reported. The reason for the focus on these points is because the author has shown that according to investigations to date there is a tendency for each of the phenomena described above to decline a little, there are various stages of change in the process, and big differences depending on the individual are evident. Based on this research background, in addition to conducting a survey of many elderly people in this paper, we used acoustic analysis and mouth shape analysis methodologically to ensure objective investigation of the true state. The study revealed in each phenomenon, while something maintains the dialect sounds and in the same way communize the language, there are things that show the difference in the position of articulation and its duration or the shape of the lip, and it became clear that each can be regarded as various aspects of speech reflecting gradual characteristics of change.

Key Words : Akita dialect, speech phenomenon, acoustic analysis, mouth shape analysis, various aspects of the change phase

キーワード : 秋田方言, 音声現象, 音響分析, 口形分析, 変化段階の諸相

1. 報告事項

本稿は、秋田方言に特徴的とされるいくつかの音声現象について、複数の高年層話者を調査し、各々の現状を報告するものである。その目的は、ひとつは上記でいう「特徴」が現在の秋田方言でも同様のこととして扱われるのか否か、それが複数の話者の間でどのような実態にあるのかを明らかにすることである。またもうひとつは、その「特徴」をより客観的にまたは検証的に把握するために、音響分析や口形分析を通して、各実相を改めて吟味することである。

このような点に着目するのは、筆者のこれまでの調査から、当方言の音声が少ないから衰退の傾向にあること、かつその過程に変化の段階的な諸相があり、個人差の大きいことが見てとれたからである。^{注1}またそうしたとき、ここでいう「特徴」自体もおのずと変質することになるが、本来的なそれも含めて、「特徴」の客観的な把握が、これまで必ずしも十分であるとはいいがたかったからで

ある。

以上のようなことを念頭に置きながら、2016・18年度の「特定地域研究ゼミ」（秋田大学地域文化学科）^{注2}では、主に秋田県の中央地区^{注3}を対象として、同方言に関する実地調査を行った。また同期間には、筆者自身による個別の実地調査も並行して行った。^{注4}これらを踏まえ、以下、具体的には次の各実態について報告を行う。

- 1) /i/ /e/ の混同・合一化
- 2) /si/ /su/ の混同・合一化
- 3) /t/ /d/ の有声化と鼻音化^{注5}
- 4) ハ行唇音
- 5) カ行・ガ行合拗音

このうち、1)・2) は母音の周波数成分であるフォルマント（男女で基準値が異なる）を分析の指標とするため、比較の観点から女性話者に限ってその実態を見る。一方、3) および4)・5) は男女性を問わずに、前者ではスペクトログラム、後者では口形画像に即してその実態を見る。

2. 調査・資料

「特定地域研究ゼミ」調査（2016・18年度）および筆者自身の個別調査（2016.7～2018.8）により、秋田方言の各言語要素（音声・文法・語彙・アクセント）に関する複数名の調査データを収集した。具体的には秋田県秋田市・男鹿市・潟上市・五城目町の高年層（70・80代）、計20名（男性7名・女性13名）である。^{注6}本稿では、このうちの音声項目を対象に、特にその動態が注目される上記の1)～5)の現象を取り上げる。

3. 分析の手法・方針

先にも述べたとおり、1)・2)では母音の調音を問題にするため、フォルマント分析を行い、F1-F2図から各話者の実相を視覚的に対照する。一方、3)では有声化および鼻音化の音響的特徴をスペクトログラムにより抽出、4)・5)では口元を映したビデオ動画を分割し、そのキャプチャー画像から唇音性の有無を判別する。分析は、各々、1)～3)がPraat、4)・5)がVideo Studioによる。

調査は質問法により、まずは各語2回をベースに発音を求めている。次に想定される方言音を自身が発音することはないか、ミニマルペアを組む語の場合は両発音が

女性アナウンサー平均		
Vowel	F 1	F 2
/i/	381	2866
/e/	510	2509
/a/	978	1384
/o/	567	894
/u/	390	1274

これに見てとれるように、女性の基準値からは母音の広狭（縦）・前後（横）の関係において、おおよそホームベース状の五角形が抽出されること、また問題となる/i/と/e/の調音も、縦軸（F1）において約130Hz、横軸（F2）においても約360Hzの差を有して差のあることがわかる。以下にはこれをもとに、女性話者13名

類似することはないかを聞き、その内省を踏まえて再度2回の発音を求めている。これらから、調査では1語につき複数の実相が得られたことになるが、本稿では、基本的には後半2回の発音を扱い、特に録音・録画に不具合がなく、分析結果に異常値がないことを基準に、そのうちのどれかひとつを分析対象に据える。なおこうした方針により、分析対象としてはより方言色の強いものが収集されがちと考えられるが、その実相が内省の前後でどう変化したかはここでは特に問題にしない。内省を踏まえても共通語的であるとすれば、むしろそのことを方を重視する。

4. 各現象・話者の実態

4.1 /i/ /e/ の混同・合一化

以下、「息」/iki/と「駅」/eki/のミニマルペアに基づき、各語頭母音の調音をF1-F2図上に対比しながら見ていく。F1-F2図は、母音の調音を第1・第2フォルマントの交点によって示したものであり、それらを結んでできる五角形はおおむね基本5母音のそれに相当する。ここでは女性話者13名の実態を対比的に見るが、その指標ともなる成年女性の基準値を、まずはNHK女性アナウンサー6名（今石元久1997より）の平均値をもとに図示してみる（図1）。

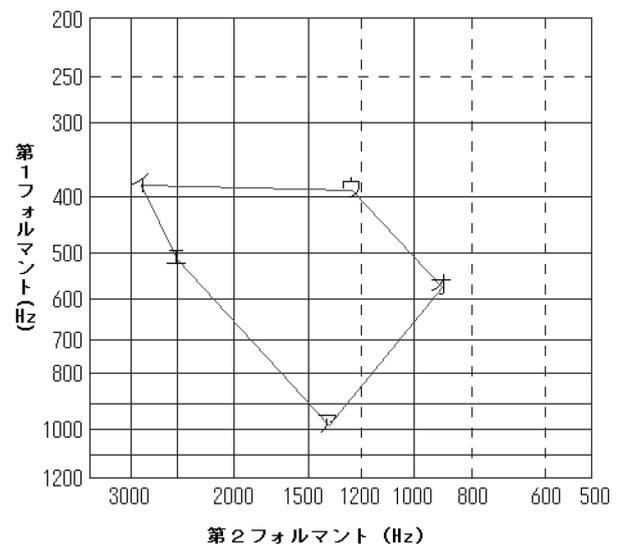


図1 日本人女性の標準的な母音体系 F1-F2図

の調音位置を見比べていく（図2・3）。なお図2・図3では、図1より/i/と/e/の基準値（以下、基準値を指している場合はイ・エと表記する）を拡大し、また数字との重なりを避けるために、イ・エを*の記号に置き換えて図示する。

【F 1 - F 2 図 凡例】

- ・「息」/iki/ と「駅」/eki/ の分析結果を左右に対照する（図 2・図 3）。
- ・*は成年女性の基準値（左上から順にイ・エ）を表す。
- ・1～13は女性話者 13 名の各調音点（番号は任意）を表す。

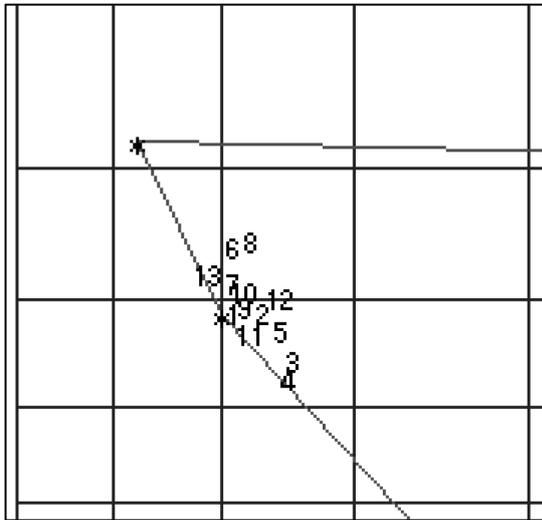


図 2 「息」/iki/

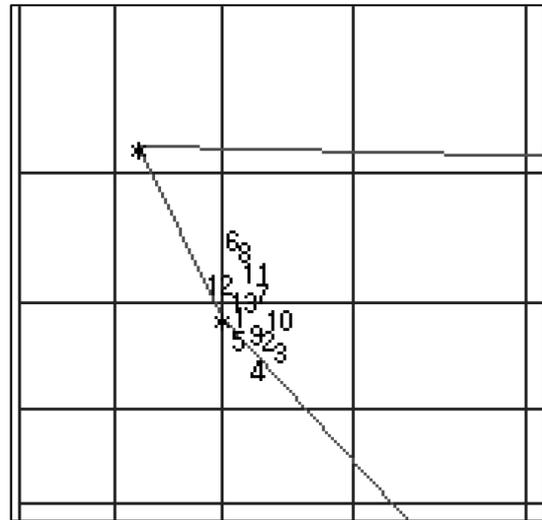


図 3 「駅」/eki/

これによれば、図 2 と図 3 にはそれほど大きな差が見られないこと、つまり /i/ も /e/ もともに基準値であるエの付近に密集して現れ、どの話者も明確な区別を持たない傾向にあることが確認できる。ちなみに /i/ と /e/ の F1 はいずれも 448～562Hz の間にあり、分布の散らばりがエの基準値 (510Hz) 周辺にあること、つまりはその大半が [e] で合一化することが数値の面からもいえる。ただし詳細に見れば、イの基準値 (381Hz) にも近寄りほぼ中間音に現れるもの（話者 6・8：450Hz 前後）、逆にエの基準値 (510Hz) よりも広母音に現れるもの（話者 3・4：560Hz 前後）もあるなど、数にこそばらつきはあるが、方言全体として見れば分布の振幅が大きいとも見てとれる。

次に F2 に関して見ると、/i/ と /e/ はいずれも 2555～2211Hz の間にあり、その差 344Hz の幅を呈する。しかし最大値が 2500Hz 前後であることから察せられるとおり、実相の多くが F2 の基準値（イ：2866Hz／エ：2509Hz）よりも低めに現れがちである。このことから、図 2・図 3 にプロットされるのは多くは平均 2300Hz 付近の密集地帯であり、結果、基準値を結んだ五角形の外辺からはほぼすべてが内側に押し込まれる形で分布することとなっている。つまり /i/ と /e/ の発音の現状として、いずれも中舌に寄って現れることが当方言の特徴のひとつといえる。

なお細かいことではあるが、図 2 と図 3 は上記のとおり、全体的な分布のうえでは大差がないながら、個々人の実態を突き合わせると、それなりに差を見せることが少なくない。話者 5・11・12 などは、比較的差が大き

いもの一例といえるだろう。これらからすれば、当方言の /i/ と /e/ の調音は、各個人において必ずしも常時一致するというものではなく、基準値エの周辺において一定の出現幅を有する性質のものであることがわかる。つまり /i/ と /e/ の個々の発音は、時に [e_i] であったり、[e_e] であったり、[e_r]～[ε] でもあったりするものであり、個人内でもその程度には幅を呈する可能性があること、逆に捉えていうならば、/i/ と /e/ はいずれも /e/ に寄った位置にあることを基本とし、少なからず /i/ 的な要素のものとしては現れないことが、当方言の現状の特質であるとまとめられる。

4.2 /si/ /su/ の混同・合一化

これについても上記と同じく、「梨」/nasi/ と「茄子」/nasu/ のミニマルペアに基づき、各語末母音の調音を F1 - F2 図上に対比しながら見ていく（図 4・図 5）。図の凡例は先と同様である（*に関しては時計と逆回りで、左上から順に基準値イ・エ・ウを表す）。

これによれば、既見の図 2・図 3 とは異なり、まずは図 4 と図 5 とでプロットされる位置が大きく異なることが指摘できる。特に図 5 には分布の塊が左右で分割される様が見てとれ、当図の（つまりは /su/ の調音を志向する）発音にはおおそそれらしく現れるものと、対極の /si/ に寄って現れるものが各々一定数みとめられることがわかる。ただしいずれの図でも基準値のイやウの近くで重なるものはなく、その点では共通語的な実相段階を示す話者は皆無であるともいえる。

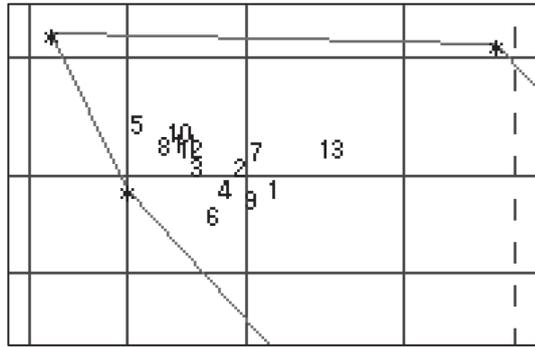


図4 「梨」 /nasi/

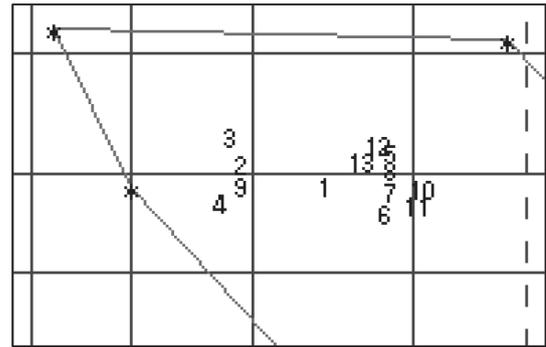


図5 「茄子」 /nasu/

次に各図の実状を個人ごとの実態に即して見ると、
/si/ と /su/ の発音は、大きくは次の諸段階に分類される。

- ① /si/ 寄りに合一：2・3・4・9
- ② /su/ 寄りに合一：13
- ③ /si/ と /su/ の中間付近で接近：1

- ④ /si/ と /su/ を区別：5・6・7・8・10・11・12

このことは、さらに図4と図5を重ね合わせて示した
図6 (①③の /si/ /su/ を同時にプロット) および図7 (②④
の /si/ /su/ を同時にプロット) を対比することでより
明確となる。

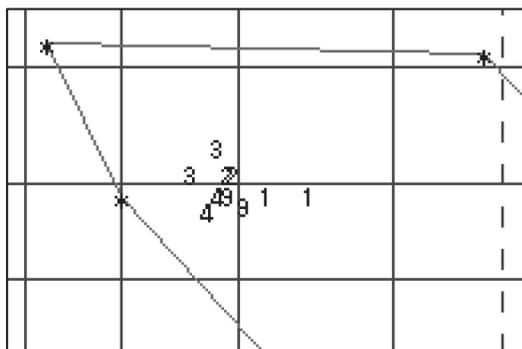


図6 /si/ /su/ ①③

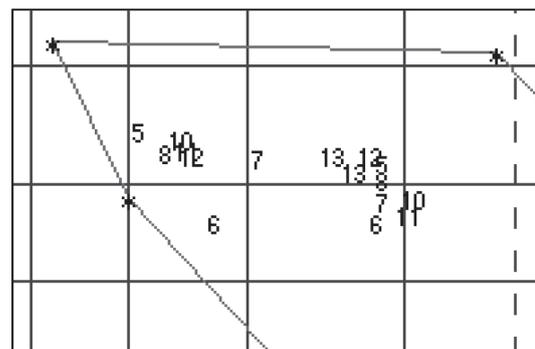


図7 /si/ /su/ ②④

つまり図6では、話者2・3・4・9がいずれも /si/ に寄った位置で合一化すること、また話者1がそれらからやや右方向 (/si/ と /su/ の中間付近) に寄りつつ、区別があるともないともつかない曖昧な状況を呈することがわかる。それに対し、図7では、話者5・6・7・8・10・11・12が大きく左右に分割され、いずれも /si/ と /su/ とを区別する状況にあること、その中で話者13のみが同時に右方向に現れ、両母音が /su/ 寄りに合一化する特殊な状況を呈することがわかる。

ところで、秋田県など日本海沿岸に位置する北奥方言では、元来、/si/ と /su/ はともに /si/ に近づいて合一化する傾向にあるとされてきた。秋田県教育委員会編(2000)に「[シ] (といっても、その音は「シ」と「ス」の中間よりやや「シ」に近い曖昧な音である) の地域が北奥、「ス」の地域が南奥に大体含まれる」(p.8) とあることなどがその証左である。すると上記の①～④は、① (話者2・3・4・9) がその本来的特質を色濃く示す段階者の群であり、④ (話者5・6・7・8・10・

11・12) がその特質を完全に落とした段階者の群であること、つまりは秋田方言の高年層にあっては、従来の合一化をそのままに維持するものがある一方、もはや悠然と区別を有するものが混在することを物語る。また同時に、①とも④ともつかない③ (話者1) のような段階者があり、さらに本来的な①とは対極の② (話者13) のような段階者も併存することを物語る。これらにより、当方言の /si/ と /su/ の現状からは、②のようなイレギュラーの事例を含みつつも (もちろんそのこと自体重要であり、別途その意味や背景を考察することが必要であるが)、^{註7} おおおよそ /si/ の方向に合一化する従来の状況 (①) が、曖昧な中途状況 (③) を経て、段階的に区別を獲得していく (④) 過程の姿が捉えられたことになる。

ただしその際、先に「共通語的な実相段階を示す話者は皆無」と記したとおり、区別を有する④の群でさえ、基準値のイヤウからはなおも距離があることには注意が必要である。その実質的「距離」は、主には図の縦軸 (F

1) において生じている。つまり F 1 の基準値 (イ: 381Hz / ウ: 390Hz) に対し、話者 1 ~ 13 のそれが 450 ~ 531Hz の間にあるという差である。もっとも東北方言の /i/ や /u/ が高い F 1 を示す傾向にあることは、今石元久 (1997) をはじめ、大橋純一 (2002) (2007) などにも既に詳細な報告がある。これは /i/ や /u/ の舌調音がそれらに見合うほどには高い位置にないことの現れであり、そうした現象もまた当方言の特質のひとつに数えられる。またそのことを踏まえるならば、当方言では比較的早くに /si/ と /su/ との区別を獲得する段階に至りながら、もうひとつの特質である F 1 の高さ (舌調音の低さ) のために未だ基準値からは遠く、全体としては方言的色合いを多面的に残す現状にあるということがいえる。

4.3 /t/ /d/ の有声化と鼻音化

これ以降は、まずは各現象の音響的特徴をそれに相応する個人の実態に即して確認し、客観的な検証を行うとともに、その現象の有無が複数話者においてどのような実態にあるかを報告する。なおここからは対象者を男性を含めた 20 名とし、これまでの 1 ~ 13 (女性) と同様、男性にも 14 ~ 20 の番号を与え、個人を表示することにする。

以下、まずは話者 19 の「旗」/hata/ (「旗振る」) と「肌」/hada/ (「肌荒れる」) について、各々音響分析した結果を左右に対照して図示する (図 8)。スペクトログラムでは縦軸に周波数 (Hz)、横軸に持続時間 (msec) がとられている。

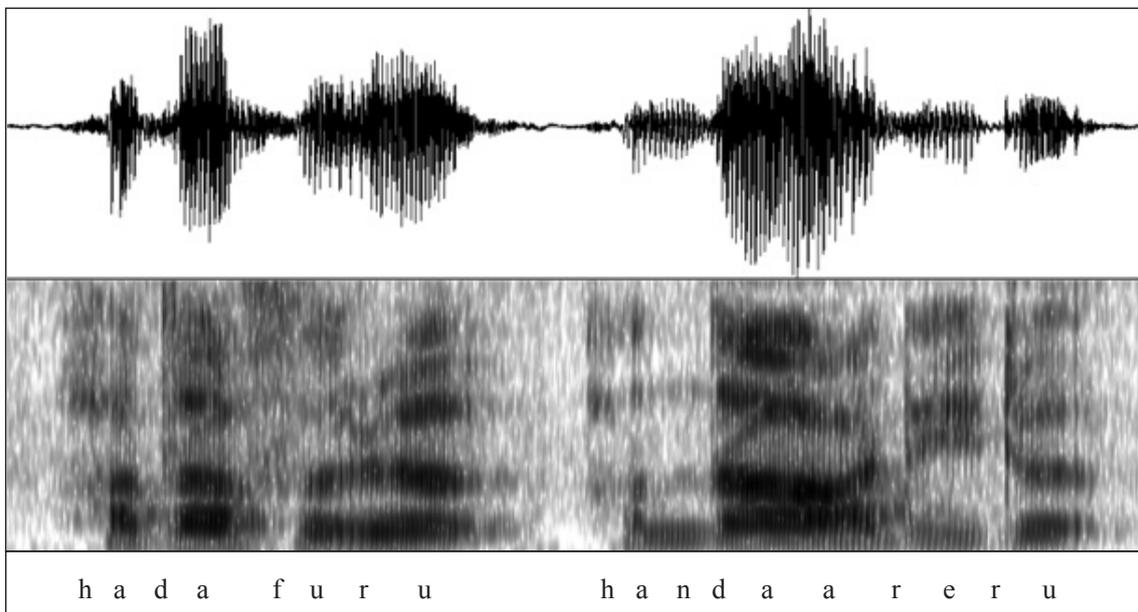


図 8 「旗」/hata/ (「旗振る」) と「肌」/hada/ (「肌荒れる」) のスペクトログラム

ここでの注目は、「旗」/hata/・「肌」/hada/における先行母音 /a/ ~ /t/ /d/ にかけての過渡部である (スペクトログラムには該当する音の区間をアルファベットをあてがう形で示した)。その箇所を最初に「旗」について見ると、(直前の無声摩擦音 /h/ の下辺一帯が空白となるのが格好の対照となるが)、一般に有声破裂音の閉鎖区間に生じるとされる低周波 (プレボイスパー)^{注8}が薄らとながら見られること、また同箇所の横幅が 43.0msec と短いことなどから、^{注9}その実相は有声化音の [hada] であるとみとめられる。一方、「肌」には縦に幅広の低周波が閉鎖区間に介在すること、そして何よりその横幅が 108.5msec と長く、先の「旗」からは +70msec 近い持続時間を呈することが特徴である。ちなみに佐藤和之

(2001) には「鼻子音の場合、低い周波数域にエネルギーが強く現れるため、それは黒く太いレゾナンスバーとしてスペクトログラム上に観察することができる」(p.78)とあり、上記する幅広の低周波はまさにその鼻子音の現れと見ることができる。よってこの「肌」の実相は、音響的特徴の面からも、また「旗」と比較した場合の持続時間の面からも、鼻音化音の [ha~da] であるとみとめられる。

さて以上からは、話者 19 の /t/ /d/ が語中環境で各々有声化および鼻音化することが視認できるわけであるが、他の複数名のそれはどのようになっているだろうか。その一覧を示したのが表 1 である (表は現象の有無を○・-で表示し分ける。以下同様)。

表1 /t/ /d/ の有声化と鼻音化に関する話者別状況

	旗	肌		旗	肌		旗	肌		旗	肌
1	○	○	6	○	○	11	○	-	16	-	-
2	○	○	7	○	-	12	○	○	17	○	○
3	○	○	8	-	-	13	-	-	18	○	○
4	○	○	9	-	-	14	○	○	19	○	○
5	○	○	10	○	-	15	○	○	20	○	○

これに見てとれるように、「旗」と「肌」の両方が○となるのは、上例の話者19を含め、過半数の13名を数える。つまり /t/ /d/ の有声化と鼻音化は、出現の割合からすれば保持される傾向にあるといえる。しかし一方、/t/ /d/ とともに共通語音に現れるものが4名、/t/ は有声化するが /d/ は鼻音化せず、/t/ /d/ とともに [d] となって区別を失っているものが3名いる。特に共通語音に現れる4名は、内省を踏まえても [d] または [˜d] の痕跡を示すものではなく、それ以外とは明確な段階差のあることをうかがわせる。また付け加えるならば、過半数を占める13名（「旗」「肌」とも○）に関しても、こと「肌」の鼻音化となると、その介入鼻音が幅広に現れるものと、それよりは幾分か狭まって現れるものとに大別される。つまり図8に例示した話者19のほか、話者1・3・4・6・14・20が前者に相当し、平均110.4msecの持続時間を呈する。また話者2・5・12・15・17・18が後者に相当し、平均75.7msecの持続時間を呈する。^{註10} その点では、方言音を典型的に保持すると見られる13名の間にも、必ずしも小さくはない介入鼻音の差があるのであり、一見すると保持するもの（○）とそうでないもの（-）との二項対立ともとれる表1であるが、その実状は思うほど単純ではないともいえる。以上を総合して捉えるならば、/t/ /d/ の実相は、①まずは過半数に及んで

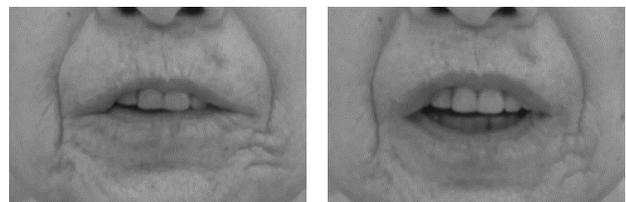
本来の有声化と鼻音化に現れる現状にあること、②ただし鼻音化の方に介入鼻音の時間差があり、そこにも段階的な諸相をみとめうること、③体系性の面でいうと、その鼻音化の方が先に消え、/t/ /d/ がともに [d] となる状況をも出来させていること、④またそれらからは大きく隔たり、/t/ /d/ がともに共通語音となるものも一定数存在していることがわかる。今後は①が漸減し、大勢としては③や④へとシフトしていくことが推測できるが、あわせて②のような差にも注目し、その動態を追跡的に見ていくことが肝要と思われる。

4.4 八行唇音

これについては大橋純一（2002）を参考に、唇音の痕跡が期待できる /hi/ と /he/ の2音節を対象とし、現象の有無を調査した。すると /hi/ の方は唇音に現れるものが皆無である一方、/he/ にはそれがみとめられること、かつ大きくは次に例示するような2通りのものがあることが確認された。つまりは図9（話者2）と図10（話者1）のような口形のものである。画像はいずれも「塀」/heɾ/ の発音過程をビデオ動画から1msec刻みで分割し、それらより /h/ の開始時点（[1]）と /e/ の最大開口時点（[2]）を抽出して示している。



[1] [2]
図9「塀」/heɾ/（話者2）



[1] [2]
図10「塀」/heɾ/（話者1）

さて、その「2通りのもの」であるが、結論的には両唇摩擦音 [ɸ]（図9）か唇歯摩擦音 [f]（図10）かの差と認識できる。各々 [1] の画像をもとに対比すると、まず図9では唇をすぼめつつ前方にやや突き出し、あたかも服部四郎（1984）のいう「火を吹き消すときのよう」

（p.71）な口形を呈することがうかがえる。それに引きかえ、図10では上歯を下唇に添えつつ、唇のすぼめや突き出しをほとんど伴わない口形を呈することがうかがえる。なおこれらを聴覚的な聞こえに照らし合わせると、前者では低くこもった響きの印象の音となるのに対し、

後者ではそれよりもやや高く摩擦の響きが鋭い印象の音となることわかる。既に大橋純一（2015）などにも例証したように、以上の各特質は、ハ行唇音の典型的段階（図9：[ɸ]）とそれが弱化していく過程の一段階（図10：[f]）を象徴するものと受け取れる。すなわち当方言の /he/ の頭子音は、同じくハ行唇音とみとめられる中

にも、性質の異なる [ɸ] と [f] の2段階が併存する現状にあるといえる。

ではそれらは複数話者においてどのように現れているだろうか。表2で「塀」と「蛇」の調査結果をもとに確認してみる（[ɸ] と [f] は前者を◎、後者を○として区別する）。

表2 ハ行唇音に関する話者別状況

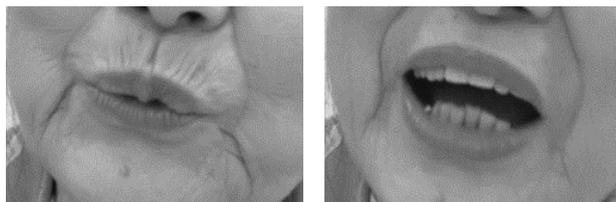
	塀	蛇		塀	蛇		塀	蛇		塀	蛇
1	○	○	6	○	-	11	-	-	16	-	-
2	◎	◎	7	-	-	12	-	○	17	-	○
3	○	-	8	-	-	13	-	-	18	-	○
4	○	○	9	-	-	14	◎	○	19	○	○
5	-	-	10	○	-	15	○	○	20	○	○

すると「塀」と「蛇」ともに唇音とならないものが7名、その何がしかの痕跡を示すものが13名と、数のうえでは唇音を保持する割合が高い。またその13名はもとより、自身は唇音には発音しない7名においても、それが当方言の特徴的な発音であることを自覚する話者は少なくない。その点では、今後この現象が当方言で喫緊に消失してしまうとか、それへの知覚が急速に薄れてしまうといったことはないものと思われる。ただしその実相が表2のように、実際にはほぼ [f] 一色の状況にあること（[ɸ] は話者2と14の一部に現れるに過ぎないこと）には注意が必要だろう。しかもその [f] が基本的には各個人の内省を踏まえてのそれであること（3の「分析の手法・方針」を参照）、つまり自らがそれと自得しての調音にも関わらず、[ɸ] に現れるものがほとんどない現状をここでは特に注意すべきである。大橋純一（2015）に従えば、この [f] を主体とする状況は、以後口唇の平唇化を助長させ、上歯と下唇との接触すら失われる状況へと変質させていくことを予見させる。また場合によっては実質声門音となり、唇音の痕跡は口形のみに現れる状況をも出来させることを予見させる。要は [f] の調音がそれ自体、今後に弱化・衰退していく

道筋を多様に孕んでいるということである。加えて上表の話者3・6・10・12・17・18など、語によって唇音になるものとそうでないものがまちまちに現れるタイプがあることなどは、その痕跡が必ずしも各個人で安定的な状況にはないことをも物語っている。これらからすると、当方言において [ɸ] の実相が今後一層減少していくことは確実であるとして、痕跡の大部分を占める [f] もそれがそのまま維持されていくとは限らない。とりわけ語により [f] と [h] の両様に現れるものがあること、また /hi/ の音節にはもはや唇音に現れるものがないことなどを考慮するならば、当現象は衰退こそすれ、さらに安定して保持されることはあまり期待できないと見るべきだろう。むしろ現状の [f] をもとに、より平唇化した実相のバリエーションが上記のように派生していくほか、表2の7名にみとめられるような、“自らは発音しないが理解はする”といった状況がこれまで以上に拡大していくことが予測される。

4.5 カ行・ガ行合拗音

これについては、各合拗音がもっとも顕著に現れた「菓子」および「元旦」を対象に考察を加える。以下、まず



[1] [2]
図11 「菓子」/kwasi/（話者5）



[1] [2]
図12 「菓子」/kwasi/（話者4）

は話者5 (図11) と話者4 (図12) の「菓子」を例に、合拗音の存在とその口唇特徴を探ってみる。画像は先と同じ手順により、「菓子」/kwasi/ の発音過程から /w/ ([1]) の調音時点 (中でも両唇が最接近する時点) と /a/ ([2]) の最大開口時点を抽出して示している。

すると図11と図12とで形状の差はあるものの、いずれも [1] の時点に唇音 [w] を想像させる調音がそれらしく現れていることがわかる。先のハ行音に照らせば、図11の方により両唇音としての特質が際立ち、図12のそれは、[f] よりも若干下唇の突き出しはあるものの、分類のうえでは唇歯音ということになろう。ただしこの2つを口唇の形状抜きに聞き比べてみると、双方に特段大きな差があるとはみとめられない。のみならず、その違いを意識的に聞いた場合にも、同じ [kwa] の音が違和感なく聴取されるに過ぎない。これは、大橋純一(2015)にも指摘したように、おそらくはハ行唇音 ([ϕ]) が「両唇で狭い狭窄を作り、その円形空間を呼気が擦過していく際に出る音」(p.20) であるのに対し、合拗音 ([w]) は「両唇をほぼ閉鎖状態に近づけつつ、……直前に迫った呼気流を擦過させる間もなく瞬時に(その意味では破裂気味に)解放しなければならぬ」(p.20) ことに起因するのではないか。つまり前者が擦過・放出を要する

摩擦音であり、その調音をどの部位で行うかで音色が異なるのに対し、後者は実質破裂的調音であり、それをどの部位で行っても音色にはあまり差が生じないことによるものと考えられる。なおその [w] については、小泉保(1996)に「日本語のワ [wa] の子音 [w] であるが、……両唇摩擦音 [ϕ] と比較すると、上下の唇の開きが大きで、摩擦音が生じない。……しかも [w] の構えからすぐに次の母音 [a] へ移動していく」(p.60) とあり、[w] が元々図11ほど律儀な閉鎖的調音を要求するものではないこと、また [w] が摩擦調音の間もなく次母音の [a] へと移動していく性質のものであること(その意味では大橋純一2015でいう「破裂気味」であること)をうかがわせる。¹¹ とすると上例のうち、図11に見られるような口形は、むしろ唇音 [w] のより丁寧で誇張された調音のバリエーションを示すものとも受け取れ、¹² 図12との差は、既見のハ行音における [ϕ] と [f] のような差とは少し事情が異なると見るべきものように思われる。

その真偽には別途議論の余地があるだろうが、以上から当方言に合拗音 [kwa] の痕跡がみとめられることは明瞭である。ではその複数話者における実態はどのようなになっているだろうか。表3で「菓子」と「元旦」の調査結果をもとに確認してみる。

表3 カ行・ガ行合拗音に関する話者別状況

	菓子	元旦		菓子	元旦		菓子	元旦		菓子	元旦
1	-	-	6	○	○	11	-	-	16	-	-
2	-	-	7	-	-	12	-	-	17	-	-
3	-	-	8	-	-	13	-	-	18	-	-
4	○	○	9	-	-	14	○	-	19	-	○
5	○	-	10	-	-	15	-	-	20	-	-

するとまず「菓子」と「元旦」がともに合拗音となるものが2名、そのうちのどちらか一方を欠くものが3名と、ハ行音に比べると唇音の衰退の色合いが強い。特に上記の「菓子」で「より両唇音としての特質が際立つ」とされた話者5ですら、「元旦」にはそれがみとめられないことなどを見ると、痕跡を示す話者の間でもその現象が必ずしも体系的とはいえないことを思わせる。またハ行音では唇音を知識として理解するものが少なくなかったのに引き換え、合拗音では逆にその知識さえ有しないとする話者が少なくない。これも、おそらくは上記したような調音の差に基づくものと考えられ、結果、合拗音は「単純にあるかないかの段階差として現れがち」(大橋純一2015. p.21) なのだろう。つまり当現象に関しては、今後表2のような現状からもさらに衰退の度合

いが強まっていくであろうこと、しかもそれは変化の諸段階を踏むというような性格のものではなく、まさに“あるかないかの段階差”の中で、衰退が一気に進行していく可能性が考えられる。

5. 音声諸現象の現状および今後の課題

以上、本稿では秋田方言の特徴的な音声について、その動態が注目される5つの現象を取り上げ、複数の高年齢話者を対象に調査した結果を報告した。なおその際には音響分析や口形分析の手法を用い、各実相の特質が客観的に、また対比的に捉えられるようにした。それぞれの現状を要約すれば次のようである。

1) /i/ /e/ の混同・合一化: /i/ と /e/ を区別するもの

はなく、各話者がほぼ大差なく /e/ の付近で合一化する。一方、少数ながら /i/ と /e/ の中間付近で混同するもの、/e/ の基準値よりも広母音になるものがあるほか、どの実相も中舌に寄って現れることが指摘できる。つまり /i/ と /e/ の実相は上記の出現幅はあるものの、少なからず /i/ 的な要素のものとしては現れないことが現状の特質であるとまとめられる。

- 2) /si/ /su/ の混同・合一化：大きくは /si/ に合一化する従来の状況が、曖昧な中途状況を経て、区別を獲得していく過程の姿と捉えられる。ただしどの段階・話者においても同じように低母音が現れ、/i/ や /u/ の基準値に重なるものがない。つまり区別する段階者を多としながらも、未だ方言的要素を多面的に残す現状にあると把握される。
- 3) /t/ /d/ の有声化と鼻音化：過半数が本来の有声化と鼻音化に現れる中、[̣d] の介入鼻音が短縮して現れるもの、その [̣d] が先に消え、/t/ /d/ がともに [d] となるものがある。つまり全体としては保持される傾向が強いながら、鼻音化の衰退を中心に、本来の [d] と [̣d] による体系が徐々に変質しつつあることがうかがえる。
- 4) ハ行唇音：過半数が唇音となり、かつその口形により [ϕ] と [f] の2段階のあることが確認できる。ただし大勢が [f] であるほか、語によって唇音になるものとそうでないものがまちまちに現れるものがあるなど、その実状は必ずしも安定的なものとはいえない。一方、どの語も唇音とはならないとする話者も、その方言音としての認識を持つものは少なくなく、今後はそうした状況がさらに拡大していくことが予測される。
- 5) カ行・ガ行合拗音：これらに現れるものは少なく、話者の方言音としての認識も明確であるとはいえない。つまり同じ唇音に関わる現象ながら、ハ行音の場合とは大きく傾向が異なる。実質破裂的調音の合拗音には実相のバリエーションが生じにくく、単純に現象があるかないかの差として現れがちである。衰退の色合いの濃い現状を踏まえるならば、今後その動きはさらに加速する可能性が考えられる。

1の「報告事項」にも記したとおり、ここに取り上げる音声現象の多くは、筆者のこれまでの調査から、変化の段階的な諸相を示すもの、またその特質の客観的な吟味が不足していると考えられるものである。その各々について、複数の高年層話者を対象とし、また上記したような分析手法を用いて明らかにしたことは、これまでの研究を補い、今後の動態を展望するという点において、意義を有するものと思われる。

しかし一方、本調査が2に記した「特定地域研究ゼミ」調査^{注13}を主体とする背景を有することから、本稿では、音節の種類や位置などを体系的に揃えた考察が十分に網羅できていない。上記の4)のように、語によって現象がまちまちに現れるものも少なくない現状に即するならば、今後はそうした不足部分を補うアプローチを進めていく必要がある。また本稿では、複数得られた実相より内省直後のそれを対象とする（その前後での変化はあえて問題にしない）ことで比較の基盤を保とうとうとした。しかし大橋純一（2017）にも論じたように、実際、各方言音の痕跡には「そうとしか発音できないといった意味での残存」（p.21）と「いくつかのやりとりの末にその発音が誘導的に確認されるといった意味での残存」（p.21）があり、そこにどういった質的な相違をみとめうるかは、本稿とは別観点により追究されなければならない課題である。これらについては補充調査を行ったうえで、稿を改めて報告することにした。

【注】

1. 大橋純一（2015）（2017）など。
2. 「特定地域研究ゼミ」は、地域課題の発見・解決のプロセスを実践的に身につけることを目的としたコアカリキュラムのひとつであり、学科所属の学生が3年次に履修する。例年15～20の講座が開かれ、学生はその中から1講座を選択して課題研究を行う。筆者の講座（「秋田方言の調査研究」）は、2016年度に6名、2018年度に7名が履修した。
3. 秋田方言の区画としては、県内を上下に3分割し、北部方言・中央方言・南部方言をみとめるものがある。中央地区は、このうちの中央方言に当たるものであり、合併後の秋田市・男鹿市・南秋田郡がそれに属する。
4. 両調査は同一の調査票を用いて行った。
5. 有声化と鼻音化に関しては本来、/k//g/もその対象となるべきであるが、分析を待つまでもなく全話者において /k/ は [g]、/g/ は [ŋ] に現れ、差がなかったことにより、ここでは /t/ と /d/ に限って実態を見る。
6. 話者はいずれも本稿の対象地区内（秋田市～五城目町）で生まれ、以後移住することがあってもその地区内にとどまるというものである。なお男鹿市の男性1名が県外の居住歴を有するが、不定期であり、合計でも3年に満たないことを確認している。
7. これについては、一部大橋純一（2017）において、残存する方言音声の質の観点、およびその世代差の観点から考察を加えている。
8. 閉鎖区間に見られるこの音響的特徴について、佐藤和之（2001）には「破裂を生じさせるために、呼気圧を高めるための動作が声帯の振動を伴って行われる・・・もので、・・・プレボイスパーと呼ぶ」（p.83）との記述がある。
9. 杉藤美代子（1996）に「日本語の場合、無声子音と有声子音の区別は声帯振動の有無以上に閉鎖の持続時間が長ければ無声子音、短ければ有声子音と聞く」（p.9）と

- ある。また実際、同(1996)に例示のある日本人の「たた」と「だだ」のスペクトログラムを見比べると、第1音節末の/a/から頭子音/t//d/にかけての時間幅は/t/の場合に大きく、/d/との差を明確に示すことが見てとれる。
10. その点、後者のタイプを [ha^hda] とするならば、前者のタイプは [haⁿda] ないしは [handa] とともに表記しうるものといえる。
 11. 話者5と話者4の「菓子」/kwasi/を時間計測すると、各々 [kw] の調音区間が57msec / 65msec, [s] のそれが171msec / 182msecとなる。つまり摩擦音の [s] に対し、[kw] はいずれも1/3程度の持続時間にしか現れないことが、「[w] の調音が破裂気味であること」の客観的な傍証となる。
 12. 実際、[w] の口形が図11のように現れるのは当該の1話者に限られ、ほかすべては図12のような、あるいは小泉保(1996)が指摘するような形状を示すものとなっている。
 13. 大橋純一(2018)にも述べたとおり、当ゼミは4年次の「卒業研究」と連動するものではなく、他コース・他分野の学生の受講を拒むものでもない。その点では、専門性を深めるといよりは、地域で生じている言語現象に実際に触れること、その意義や面白さを体感することに主眼があるといえる。

参考文献

- 秋田県教育委員会編(2000)『秋田のことば』無明舎出版
 今石元久(1997)『日本語音声の実験的研究』和泉書店

- 大橋純一(2000)「北奥方言・南奥方言接触地域における /si//su/・/ci//cu/・/zi//zu/」『国語学研究』第39集
 大橋純一(2002)『東北方言音声の研究』おうふう
 大橋純一(2007)「言語接触地域における /i//-u/ の実相と分布—新潟県北部方言の場合—」今石元久編『音声言語研究のパラダイム』和泉書院
 大橋純一(2014)「口唇形状からみたハ行唇音の痕跡の諸相」『秋田大学教育文化学部研究紀要』69
 大橋純一(2015)「口唇の特徴から見た東北方言の合拗音の諸相—ハ行唇音との比較を通して—」『方言の研究』1
 大橋純一(2017)「残存する方言音声の質的バリエーション—典型から知識レベルの実相まで—」『秋田大学教育文化学部紀要人文・社会科学』72
 大橋純一(2018)「生活空間に見られる方言使用の実態—秋田方言の内向け・外向けの実態と意識—」『秋田大学教育文化学部紀要人文・社会科学』73
 小泉保(1996)『音声学入門』大学書林
 佐藤和之(2001)「日本語音声の生成と音響特徴」城生佰太郎編『日本語教育学シリーズ第3巻 コンピュータ音声学』おうふう
 杉藤美代子(1996)『日本語の音 日本語音声の研究3』和泉書院
 服部四郎(1984)『音声学』岩波書店

付記

- 本研究の一部は、JSPS 科研費 JP18K00602 の助成を受けて行ったものである。